

## 車夫 嘉平と伊助

なりひらいちへいた  
成平一平太

「嘉平、伊助。 嘉平と伊助はいてるか」

役場から戻ったくるま屋『丸大』の親方、大山五郎太は履いていた草履を後ろに飛ばし、上がり框で大きな声を張り上げた。

「あんた、大きな声ださんかて。 子供が目をさましますがな」

女房のきぬは、五郎太の足元に下に怪訝そうな視線を落とし、「せっかく磨き込んだ板間が真っ白じやないか」と続けた。

「きぬ、嘉平と伊助はもう出掛けたんかいな？」

「見たらわかりますやろ。 土間に残っているのは予備の車一台だけでおます。 それより、早ように足袋を脱いでおくれやす」

きぬに咎められて五郎太は、自分のあわて振りに初めて気付いた。

くるま屋『丸大』は旧墾田藩の勘定方だった五郎太の父、大山宗太郎が十五年ほど前に、なけなしの金を叩いて買い求めた人力車一台から興し、喰っていかん

がための商売だった。 宗太郎は五郎太と二人で休むことなく人力車を引き、今では車夫十五人を抱える大店にまでなっていた。

ここ大津町では当時、人力車は高級役人のお抱えとしての乗りもでしかなかったが、宗太郎によって馬や籠に代わる乗り物として評判を呼ぶこととなった。 今では、丸大以外にもくるま屋は大津町やその近隣に存在してはいるが、何れも丸大の暖簾分けを受けての店だった。

宗太郎亡きあとは五郎太が丸大を取り仕切ると共にそれらの元締めとして一目置かれていた。

「それで、お上のご用はなんどしたん？」

羽織り袴から、丸大と大きく染め抜かれた半纏を五郎太の背中に掛けながらきぬは、胸のつかえを降ろす機会を伺っていた。

「ズウズズ」

長火鉢を前にあぐらをかいた五郎太はきぬが差し出した湯飲みを口にあてた。

「もう、あんさん。 もう少し品よく飲めませんか」

きぬは、五郎太に見初められてこのくるま屋に嫁いで六年ほどになる。 嫁いでしばらくは子供に恵まれることはなかったが、四年目にして男の子、翌年には女

の子を産んだ。いつときとて目の放せない子育てをしながらも、きぬは丸大の帳場を預かつていた。

五郎太は宗太郎が他界して喪が明けた翌年の春に、新たな店をかまえて三人の車夫を雇い入れた。そして十年も経たない今、その車夫の数は十五人を超えた。いずれも改藩置県の憂き目にあい、禄を失った旧堅田藩の下級武士の子息だった。

その多くは、底辺をはいずりながら喰うや喰わずの生活を五郎太に拾われたといっても過言ではなかった。その中に井脇嘉平と大場伊助がいた。

「嘉平、加代さん。世話を掛けてすまない」

「なにを言っているんですか父上。それよりお二人とも、あまり根を詰めないでくださいよ」

「そうですね、お義父さま。風などお召しにならぬように囲炉裏の火を絶やさないでくださいね」

嘉平は、年老いた両親と妻の加代、嫡男の一太郎と娘あやとの暮らしを必死に守っていた。二月の大津は、雪も多く底冷えのする日が続く。囲炉裏にくべる薪は、秋の内に山から拾い集められていた。貧しさゆえに、正月らしい年明けなど望むこともできなかったが、ふんだんに集められた小枝が井脇家の心を温めた。

嘉平夫婦は工事人足として朝早くから出掛けることで生活を支え、老夫婦はマツチ箱の広告貼りでその生計を助けた。マツチ箱の内職は老夫婦が自由にできる全ての時間をそれに当てても茶碗二杯分の白飯代が一日の稼ぎでしかなかった。それでも芋や大根を混ぜて粥にすれば家族の夕飯とすることはできた。

「嘉平、一太郎は今年の春から尋常小学校に上がる。金は大丈夫か？」

「父上が心配なさらなくても何とかかなりですよ」

いつものように嘉平と加代は、雪の降り積もる中を朝早くから出掛けた。冬の間は工事仕事はなくても除雪作業が井脇家の家計を支えた。主要道路の除雪のためにと、役場が多くの人足を毎日集めることで仕事に溢れた貧しい暮らしの者たちを救った。それでも一人分の手間は、家族がその日一日の食事時に一汁、一菜を食卓に並べれば消えてしまうほどでしかなかった。食以外を賄うには、加代も働くしかなかった。

嘉平に金の当てがあるわけではない。今の暮らしを支えるだけが精一杯の生活だった。暮らしを維持するために下級とはいえ武士であったことは忘れるしかない。もっとも武士などとは名ばかりで、暮らし向きの実態は今と大きくは変わらない。しかし、時の移り変

わりと共に大きく変わったことに教育制度があった。

誰もが歳がくれば義務教育の名の下に尋常小学校に上がり教育を受けることができる。身分になんら左右されることはない。嘉平には有り難い制度だった。

一太郎には、何としてでも今の暮らしとは縁のない大きな人間になつて欲しかった。代々、下級武士として生きるしかなかった井脇家の定めからの脱却を一太郎に願つた。それには学問を身につけるしかない。嘉平は考えていた。そのために必要とする金は、身体を駆使することも厭うことなく稼ぎだしたかった。

嘉平は人足仕事が雨によって断たれる日でも加代を家に残し、日銭仕事を探しに町に出た。

「あなた、お疲れになつたでしょ」

「なあに、たいしたことはない。それより今日の稼ぎはいつもより少し多い」

二月には珍しく、昨日の夕刻より激しく雨が降つた。人足仲間から聞いていた雨の中での仕事の中に、降水量によつては川の水が溢れだしそうな箇所への土囊積みがあると聞いていた。冷たく降りしきる雨ではあつたが、夜が開けぬ内に長屋を出た成果だった。

「ご苦労様でした。それではこれは一太郎のために」「ああ、そうしてくれ」

加代は、嘉平から受け取つた日銭を押しいただき箆箭の奥へと仕舞い込んだ。

「あなた私、明日から料亭の仲居をしようかと・・・」加代は、箆箭の引き出しを押し込むと振り向きざまに嘉平の顔を見ながら微笑むように口にした。そして、雨になれば仕事が無くなる人足よりも安定した実入りになると付け加えた。

「加代、苦勞を掛けてすまない。しかし、仲居はよせ」「なぜでございます」

加代は、戸惑いをみせた。しかし嘉平は、加代の問いに応えることなく「どうしてもだ」と、念を押すかのように加代の顔を見据えた。

嘉平は、加代に人に媚を売るような仕事をして欲しくはなかった。媚びを売るくらいなら、泥に汚れながらの日銭稼ぎの人足の方がまだましだと考えていた。

「加代、暮らし向きが苦しいのはよくわかつている。なんとかしたいのだが・・・」

「いいんですよ。私は苦勞だなんて思っていませんよ」「そうか・・・」

嘉平は、加代が差し出した熱めの湯飲みを手に「一太郎のためにも違う仕事を・・・」と、呟いた。

「もし、こちらの旦那様はおいででしょうか？」

嘉平は、広い土間から奥に向かつて大きな声を投げた。雨の日に、饅頭笠に蓑を付けて人力車を引く車夫を見て、これなら天気に関係なく昼も夜も仕事ができると思ひ、丸大の敷居を跨いだのだった。

車夫としての実入りは嘉平にとって年老いた両親と妻の加代、嫡男の一太郎と娘あやの生活を営むに何ら不従するものではなかった。とりわけ大店の旦那衆や置屋の姐さんからの心付けは有り難かつた。

「一太郎。いいか、おまえは日本国を動かすような男になれ。広く世の中を見渡せる男になるんだ」

嘉平はことあるごとに尋常小学校に上がったばかりの一太郎に言つて聞かせた。下級武士の家柄であつても努力をすれば国を動かすこともできる世に生きていくと。そのためには学問をおこたるなとも説いた。

一方の大場伊助は、十表足らずの祿高に加え、藩から与えられた僅かな土地を耕しながら百姓同然の生活だった。その生活も廃藩置県によつて全てを失ひ、服毒による一家心中を凶つたものの伊助だけが辛うじて一命をとりとめた。十歳の誕生日を明日に控えた十一月の半ばだった。一旦は親類の家に引き取られものの正月三が日を過ぎると、直ぐさま伊助は穀物問屋に丁

稚として奉公に出された。

「ほな、今日から伊助改め助松や。店の看板に恥じないようにしつかり働きや」

「はい。よろしくお願ひします」

「はいやない。へいよろしゅうお願ひ申しますや。もう一変言い直してみい」

頼るあてもない伊助は必死に働いた。昼間の雑用のあと、店を閉めてからは読み書きとそろばんを厳しく仕込まれる毎日だった。下級武士の子供といえども、前髪を落として帯刀を持つことを夢見ていた頃とは大きな違いの生活だった。

「助松―。なにぼ―としとんねん。はよ片付けんかいな。日が暮れるで」

「助松。お前のせいでおれまで怒られるがな。しつかりしてや」

素足に草履と黒い前掛。百姓の子供であろうが商人の子供であろうが同じ扱ひ。無給の丁稚奉公ではあつたが暖かな布団と食だけは保証されていた。

十年の月日が助松を商人としての顔に変えた。手代へと引き上げられ、丁稚名の助松から伊助へと呼び名も戻された。僅かではあつたが、毎月の給金を受け取るようにもなれた。下級武士の家に産まれ、これまで

自由に使うことのできる金銭など手にしたことのない伊助には欲びよりも戸惑いの方が大きかった。

「伊助、店が引いたらちよっと付きおうていな。ええとこ連れてつたる」

薄暗い夜道を伊助は、年上の手代勘治に連れられて町外れの小さな一軒家の板戸を開けた。薄暗い部屋の中には異様な空気が流れていた。四隅に置かれた蠟燭の灯が時折歓声を上げる男の顔や、苦虫を潰したような男の顔を映し出していた。

明治となつて二十年以上も過ぎれば世の中は落ち着いたものとなる。誰もが努力さえすれば家柄に縛られることもなく金持ちにもなれば、国を動かすこともできる。生まれながらにして下級武士の家柄では下級武士のまま年を重ねるしかなかった徳川の時代。そんな伊助にも夢を見ることのできる明治だった。だからといってそれほど簡単なことでもない。元手も必要なら知恵もなくてはならない。商いに必要な名読み書きとそろばんだけではなく、広い世間に通用する学問を身につけなければ金持ちにはなれても国を動かすほどにはなれない。大店とはいえ手代にできることはたかがしれている。元手を作ることさえ容易ではないことを伊助は知っていた。

「どうや、伊助も遊んでみいや。難しいことあらへん。あの兄さんが振る壺の中のサイコロの目を当てるんや。二つに一つの確率や」

伊助の戸惑う様子に年上の手代は、「給金なんてなくても喰うには困らへん。二円ぼっちではよそ行きの着物も買わらへん。それでも二十円なら女遊びかてできる」と続けた。

何もわからぬままに伊助は丁半博打に手を出した。二円の給金が九枚の木札に替わった。サイコロが振られるたびに伊助は木札を一枚、二枚と賭けた。回を重ねる毎に伊助の顔が緩んだ。何もわからぬままに時が過ぎ、二時間ほどで九枚だった木札の数が百枚を超えた。二円の給金が僅かな時間で十倍以上に増えた。木札一枚が二十銭、帳場での交換毎に一割が差し引かれる仕組みになっていた。手垢で汚れた木札が二十三円となつて伊助の懐を豊かにした。

「ええか、伊助。博打は潮時が肝心や」

「潮時な」

「そうや、潮時や。今日のわしはついとらんかった。

それでも、損はしとらん。元手の二円はそのまま残つた。伊助は二十円以上の儲けだ。ここでくっそうと思つたら二円が消えてしまうどころか証文を書かされる

羽目になる。伊助かて同じや、もつともつと欲がでれば潮目が変わっておけらや」

「潮時に潮目か・・・」

戸板の中の薄暗い空間は伊助を興奮させ、これまでにない新鮮な出来事となった。

「勘治さん、なんか美味いもんでも・・・」

「よせよせ、今日のところは大人しく帰って寝るのが一番や」

「そやかて、懐は暖かい。お酒も呑んでみたい」

伊助にはこれまで酒を呑む余裕などなかった。

下級武士とはいえ二十歳ともなれば元服も済み、大小の刀を腰に携えているはずだった。もつとも、刀を買うほどの金子を蓄えることができたかどうかは怪しいものだった。下級武士の家柄では喰うや喰わずの毎日。正月でもない限り伊助の家の水屋から徳利が出てくることなどはない暮らし向きだった。

「伊助、ええか。酒を呑むならほどほどにせい。足元がふらつくほど呑むとろくなことがない一。もうひとつ、白粉を塗った女のいる店では呑むな。高いものにつく」

足元のおぼつかない勘治の体重の半分が、伊助の肩に重くのしかかる。伊助の足元とて尋常ではなかった。

降り注ぐ満天の星を見上げる精神的な余裕もない。すでに深夜の十二時を過ぎている。一刻も早く店の浦木戸に回って使用人部屋の屋根に小石を投げなければ布団にありつくことはできない。

「伊助、女遊びはこの次や。わしも、おまんも儲かった時に連れつてたる。人の金で遊ぶは女あいてに失礼や」

伊助が使用人部屋の屋根に向かって小石を投げると小さな音が転がった。ほどなくして門を外す音がした。辺りを伺うかのようにしながら女中が板戸の隙間から顔を出した。どうやら勘治といい仲のようだ。

初めて知った酒の味。「わしの方が呑んだ酒の量は多かった。わしは酒に強い体質かもしれん」そう呟きながら翌朝、重い頭を搔きむしった。二日酔いさえも楽しむかのように伊助は布団から起き上がると廁へと向かった。

この日を境に伊助は、給金を受け取る度に賭場へと出掛けるようになった。

「やめとけ伊助」

店の表戸が閉められると夕食もそこそこに伊助は裏木戸の門に手を掛けた。それを勘治が遮った。

「やめられん。いい思いしたんは手代になって初めてやった一度だけや。あんとき儲かった以上に今は損し

てる。取り戻さねばやめられん」

「気持ちにはわかるが人に金借りてまでやったらあかん。おまえには博才がないのや。金だけやのうて自分の信用までなくすで」

勘治の制止を振り切つてまで出掛けた賭場での伊助に巡つてきた潮目。夜が明ける頃には抱えきれないほどの木札が伊助の前に積み上げられた。隣室の帳場で伊助は木札を金に替えた。十枚ごとに束ねて折られた一円札。伊助は十二の束を腰に巻いたさらしの中に押し込み、小走りで店を目指した。店の裏木戸に着くといつものように小石を拾い上げ使用人部屋の屋根に転がした。

「伊助、もう朝やで。寝ずの勤めになるやないか？」

客商売の店、寝不足で目を腫らした手代が客の相手をすれば信用にかかわる。第一、旦那様にきつくお叱りを受けると勘治は続けた。

「伊助、今日限りで暇をやるさけえ出て行け」

案の定、昼前になつて店の主人に呼ばれ、伊助は暇を出された。

仲間の使用人たちに借りた金に幾ばくかの利息を付けて借金を清算し、その日の内に小さな長屋を伊助は見つけることができた。古道具屋を何軒か廻り、当座

の所帯道具を買い揃えても使い切れないほどの金が伊助のさらしの中には残っている。

「どうするか。働かなくても数年は喰うに困らないが・・・」

寝ずの博打の上に、ねぐら探しに駆けずり廻った伊助に眠気が襲つた。どれほど眠っていたのだろうか。伊助が目を覚ましたのは翌日の昼近くになっていた。

早々に飯を炊き、味噌汁で空腹を満たすと伊助は、引越しの挨拶廻りにと手拭いを持って長屋の住人を廻ることにした。

「あんた男のくせに器用だね。うちの亭主は飯も炊けやしない」

右隣の住人は五十近い夫婦ものだった。笑いながら亭主の愚痴をこぼすくらいだから仲はいいのだろう。女房が手間賃稼ぎの針仕事で左官職人の亭主を助けながら育てた二人の子供も、今は呉服屋に奉公に出ているとのことだった。

「ところであんた仕事は？」

「昨日までは穀物問屋で手代を・・・」

「暇を出された。凶星でしょ。店の女中に手をだした？まさかお嬢さんに・・・」

「違う、違う」

伊助は盛んに手を振り、否定はしたものの博打が原因とは言えなかった。小さな長屋の住人たちが二人の会話を聞きつけ集まってきた。伊助はそれぞれに手拭いを配りながら挨拶を交わした。

「さすがに大店の手代をしていただけのことはあるわね。律儀に手拭いまで・・・」

「背丈も大きくて身体もがっちり」

「それに、そこそこ男前だし」

「あら、そこそこは伊助さんに失礼よ」

年増の女たちの笑い声が長屋に響きわたる。

これ以上は話に付き合っていられないとばかりに伊助は、仕事探しに出掛けると言い残して長屋を出た。

「どうせなら日銭を稼げる仕事がいいわよ」

左官屋の女房が伊助の背中に投げた。二十代半ばに手が届こうという伊助に今更職人仕事を身につけるには無理がある。かといって日雇い人夫はと見えあぐむ伊助の横を人力車が駆け過ぎていった。

伊助は古道具屋の表に「売り物」と書かれた貼り紙の付いた中古の人力車を想いだした。

「ご主人、表の人力車。あれなんぼや？」

「あれでっか・・・」

店の主人は伊助の顔を見て訝った。「あんたみたいな

若造に買える代物ではない」と言いたげな目つきである。

「九十五円ですけど・・・」

「ご主人、九十円にまけて」

「あんさん買いなさるんですか？」

「わしではあかんか？」

「とんでもない。お足さえいただければ・・・。いいでしょ。特別や九十円にしときます」

さきほどまでの顔つきをひっくり返したような笑顔で伊助を店の奥に招き入れた。座布団を勧め、店主が自ら茶を入れ伊助の前に置いた。

「それで、お足はどのようにお支払いいただけるのでしょうか？」

相変わらず店主の笑みは顔から溢れんばかりである。「今ここで全額を」

伊助は懐の中に手を差し込み着物の下に巻いたさらしの中に手を入れて札束をだした。

「そうですね、お客さんはお若いのに目が高い。あれは掘り出し物でっせ。お足を稼ぎ出すお宝。お客さんならすぐに元がとれまっせ」

揉み手をする笑顔の店主をよそに伊助はたちあがり札束をさらしの中に戻した。



「もう一度よく見せてもらいます」

「どうぞ、どうぞ。納得がいくまで見たっておくれや  
す」

この古道具屋では、箆笥や長火鉢の類が主な売り物らしい。もっとも高い物でも五十円を越えることはない。しかし今、唯一これを凌ぐ人力車が売れようとしている。いや、間違いなく伊助が買うと店主は笑顔を絶やさぬ。大きな儲けが降つて沸くかのように賑がり込んでくる。

「盆と正月が・・・」店主は心の中で呟いた。

「ご主人。よく見るとあちこち傷んでいるようやし、  
手を入れんと商売には使えんな」

「そないなことあるかいな」

伊助の一言は、主人の顔を一瞬の内に曇らせ口を真一文字に括り付けた。

「どうや、七十円やたら今、即金で払うけど」

「ええつ、七十円でつか？」

だてに大店で手代はしていない。相手の顔色で落とし処を見抜く腕を磨いてきただけのことはある。

「しゃあないなあ。あんたさんには勝てません。七十  
円で売りますよ」

店主は渋々承諾するしかなかった。

「盆と正月のはずが盆だけになってしもうたがな」

伊助が人力車を引いて帰るのを見送りながら店主は  
呟かずにはいられなかった。

「まあ、それでもいつ売れるかわからんよりは良かったがな」と続け、店の中へと入った。

伊助が買い求めた中古の人力車を引いて長屋に帰えると、話好きの主婦たちが井戸の廻りに集まり夕餉の支度を始めるところに出くわした。

「伊助さん。どうしたんそれ？」

早々に主婦たちは人力車に興味を示した。

「古道具屋で買ってきた。明日からのわしの飯のたね  
や」

「こんなすごいもん高かったやろ」

「そおや。伊助さん、あんた金持ちやなあ」

「いくらしたん」

主婦たちの驚きは直接的だった。すべてが金に繋がる質問を次々に口にした。

「九十五円を七十円に値切つて買ってきた」

伊助は自慢げに人力車の輪に手を掛けた。

「七十円つて、家の亭主の二年分の稼ぎに近いがな」  
「ほんまや。そんな大金、わてらでは一生かかっても  
貯められんわ」

大工や左官に指物師、鍛冶や畳職人が住む小さな長屋。亭主たちが持ち帰る給金では、日々の暮らしを維持するだけが精一杯だった。そんな主婦たちには、伊助が口にした七十円は溜め息の出る金額だった。

「おっちゃん、ちよつとだけ乗せてえな」

「わしも、わしも」

いつのまにか、遊びから帰って来た子供たちが人力車の前に集まっていた。

「じゃあないな。ちよつとだけだぞ」

伊助は、まんざらでもなさそうに子供を二人づつ人力車に乗せ、通りまで出ては長屋に帰ってきた。

「なんか乗り心地わるいなあ」

ひとりが口にすると子供たちは次々と、せっかくお大尽になったみたいになれろと思っていたのと不満を口にした。

「子供ではわからん。この長屋は職人ばかりや。私らもちよつとづつ乗せてなあ」

鍛冶職人を亭主に持つ婦人が子供の頭をなぜながら、皆の知恵を借りることを伊助に勧めた。

「じゃあ、今日はもうすぐ日も落ちるし、明日改めてお願いします」

有り難い勧めなのか、迷惑な話なのか。伊助には判

断に迷うところではあったが、幾つかの修繕が必要なことも確かだった。

長屋の住人たちがそれぞれの家に散ると伊助は、入り口の戸を外し、人力車を家の中へと入れた。夜露に人力車を濡らすわけにもいかなないのは当然ではあったが、中古とはいえ高価な代物でもある。万が一を考えるところするしかなかった。

翌日、伊助は長屋の主婦たちを交互に乗せてどこをどう修繕すればよいかを尋ねた。

「車輪と車軸にゆがみがあるようだね」

「椅子も直さないとお尻が・・・」

「幌にもほつれが」

「色もはげているしね」

「ひざ掛けも欲しいわね」

伊助は、問題があると思われる箇所を長屋の職人に相談しながら、それぞれに手間賃を払って直すことにした。

十日ほどで中古の人力車は見違えるほどになった。手間賃は材料を含めて十円ほどを必要とした。その間に伊助は、車夫としての衣装を買い求めるために町に出た。あれやこれやと迷った挙げ句、背中には丸伊、襟元には伊助と染めた半纏を新調することにした。と

同時に、どの辺りで商売を始めるかの下見にも余念がなかった。

客から貰う手間賃は一・二銭。まれに遠出の客もないではないが、そうそう伊助の思い通りにはならない。それでも一日当たり、心付けを加えれば三十銭ほどにはなった。

「この調子なら一年もすれば元がとれるな」

一箇月もすると手代の伊助から、どこから見ても車夫の伊助へと変わった。元来、身体も足腰も丈夫な伊助には、もってこいの商売だったのかもしれない。昼間は身体を休め、金のありそうな連中が夜遊びをする時間帯に人力車を動かす方が効率が良いとばかりに夕刻少し前に客待ちをすることになっていた。

「お兄さんいいかい？」

伊助に負けず劣らずの体格のいい若い男が声を掛けてきた。

「へい。おおきに。どうぞ」

すっかり車夫が板についている。伊助は男の指示で町外れの八幡神社に向かった。あと十分もすれば着く。四銭は貰わなければと呟きながら伊助は、人力車を引いく手に力を込めた。

「おい、若いここで止める」

最初に声を掛けてきた時とは違い、声に重みがある。

「お客さん、ここらで何かあるんで？」

薄暗い夜道。周りには何も無い。月明かりが微かに辺りを映し出す。物音に気付いた伊助は目を凝らした。木陰から数人の男が手に棒切れらしき物を持って出てきた。

「若いのが、なかなかのものじゃないか。腰が退けているのに梶棒を放さないとは」

伊助とて走ってこの場を逃げたかった。しかしまだ始めたばかりではあっても車夫の仕事は多くの日銭を稼ぎ出す。なによりも七十円に修繕費として十円をも掛けた人力車を放り出すわけにはいかなかった。

男たちは伊助を取り囲んだ。一見してやくざとわかる男たち。座席の客はこの男たちの兄貴分なのである。この男たちを使って待ち伏せをするように指図をしたに違いないと伊助は思った。

「若いのが、ここいらは安藤組の縄張り。車引きの商売をするなら前もって挨拶に来てもらわないと俺の面子がたたない。わかるよな」

相変わらず人力車に乗った男の声は重く、伊助の背中に響いた。がしかし、伊助には男の言っている意味がわからなかった。

男が車から降りると、人力車を取り囲んでいた男たちは伊助に襲いかかった。武士の家に産まれたからといって剣術ができるわけでもない。身体が大きいばかりで戦い方を知らない伊助。半纏は泥で汚れ、顔は赤く腫れ上がり、真っ直ぐには立ち上がれないほどに伊助の体中に痛みが走った。

「伊助さん、みかじめ料として今夜は十円、来月から月末に五十銭。商売がしたけりやそういうことになる」  
「十円なんて大金・・・」

どうして俺の名前をと思ひながら咄嗟に十円なんて払えないと伊助の口を突いてでた。

「伊助さん、うちの賭場で稼いだ金で始めた車引き。勝ち逃げは困る。一箇月も車を引けば十円くらいの水揚げはあるだろう。みかじめを払ってもじゅうぶんな金が残る。また遊びに来てくださいよ」

横倒しになった人力車を男たちが起こし、伊助が棍棒に手を掛けてゆつくりと歩きます。二人の若い衆が伊助を見張るかのように横に付いた。長屋に帰ればこの男たちに十円を渡さなければならぬ。この一箇月、車引きで得た金がすべて持って行かれることになるが警察に訴えることもできない。もぐりの車夫の訴えが聞き入れられるわけがない。あのやくざの兄貴分は、博

打で得た金のほとんどが人力車につき込まれたことを知っていたのだろう。だから金が貯まる一箇月を待って襲ってきたに違いない。

「安藤組の若いもんを伴の車引きも珍しい」

町に入ると提灯を下げた男が伊助たちを遮った。

「丸大の元締め」

腰を折って敬意を示す男を横目に、伊助の目の前まで大山五郎太が近寄ってきた。

「若い、伊助さんっていうのか」

「・・・」

伊助と染め抜かれた半纏の襟元を思わず握り絞めた伊助は、五郎太の威圧するかのような眼光に完全に呑み込まれて何も返すことができなかつた。

「随分と痛めつけられたな」

五郎太は何度も頷きながら伊助の肩を軽く叩いた。

「若衆、いくらの集金を命ぜられた？」

「へい。十円を」

「そうかい。一箇月で十円か・・・。これで蕎麦でも喰って帰りな」

五郎太は懐から一円札を十枚だし、さらに一枚を足して男に渡した。安藤組の若い衆は五郎太に何度も頭を下げながら後ろ姿を残した。

「伊助さん、ついてきなさい」

先程とは打って変わって五郎太の目は優しく、伊助には大きな背中が頼りげに映った。恐怖心にも似た重苦しさを乗せての人力車だったが、大五郎がそれを追いついてくれた。と同時に、棒切れの乱舞に音を立てて軋んだ身体が悲鳴を上げ始めた。伊助が引く人力車の後ろ姿は誰が乗っているわけでもないのにやけに振らつき、地面に食い込んでいくかのように感じられた。

「伊助さん、この町で人力車を引くにはお上のお許しが必要だ。鑑札がいるということだ。もつとも、それを貰うのはなかなか難しい。稼ぎの如何に関わらず税金もいる。伊助さんを痛めつけたやくざにみかじめ料も払わなければならない。なんでもそうだが、商いを始めるにはそれなりのことがついてまわる」

くるま屋、丸大の上がり框に腰を降ろした伊助に一段上の板間から五郎太がかみ砕くように語りかけた。

博打で思わぬ大金を手にした伊助。博打が祟って大店から暇を出されることになった。車夫なら喰うに困らないと、大金を叩いて人力車を買入れ修繕を施した。思った通り一箇月も働けば十円の手間賃が入った。これまでの給金の五倍にあたる。同じ長屋の職人たちは、精々が月に三円五十銭も稼げばいいほうだろう。

投資した金は少なくみても一年もすれば取り返せる。さらに大きく何かをすることだつて夢ではない。この一箇月、伊助はあれほど好きだった賭場の板戸を開けることなく梶棒を握り続けてきた。しかし、その稼ぎも見せしめの名のもとにみかじめ料として。地元のやくざに脅し取られてしまった。それも、身体のあちこちに痛みを押し込められるおまけ付きだった。

五郎太は滋賀県一帯のくるまや屋の元締めだった。伊助には五郎太の話を大人しく聞きく他はなかった。

「伊助さん、あんたに車夫の鑑札が下りることはない。人力車を持っていても使い道はないということだ。あの古道具屋に引き取ってもらうこともできるが二十円がとこだらう。おれなら二十三元で引き取ってもいい」

「そんな、一箇月前に七十円で買った車が・・・」伊助は、そんなことはないと言おうとした。

「まあいい。今日のところは十円をおれが立て替えた。車はおれが預かる。おれは金貸しじゃないからいつでも十円を持ってくれば車は返してやる」

それから一週間ほどが過ぎ、身体の痛みが癒えた伊助は五郎太のもとを訪ねた。そして、その日から丸大の車夫として梶棒を握ることとなった。伊助の人力車は五郎太が買い取り、そのまま伊助が受け持つことと

なつた。

五郎太が役場からの呼び出しがあつたのはそれから三年の月日が流れていた。

「元締め、ただいま帰りました」

十一時近くになつて嘉平が帰つてきた。

「ご苦労さんやつたな嘉平。ちよつと話があるさけえこつちへ」

五郎太は嘉平を長火鉢の前に座らせた。

いつもであれば仕事を終えて帰つてきた車夫たちは、真つ先に人力車の泥を落として明日の仕事に備えた。綺麗に手入れを済ませると土間の隅みに立てかけるように車を片付け、脇に設けられた長机に用意されている飯に熱い湯を掛け、漬け物をかじりながら腹の中へとかけ込んでいた。

長火鉢の前に座つた嘉平の前に置かれた膳には、白い飯と共に徳利が一本添えられていた。

「元締め、これは・・・」

「まあいいから、伊助が帰ってくるまでゆっくりしていけ。話はそれからだ」

嘉平には戸惑いがあつた。何の話かは見当もつかないが悪い話ではないことを徳利が示している。徳利が

空になると五郎太はきぬを呼んで二本目を持って来させた。そこに伊助が帰つてきた。伊助にも徳利の乗つた膳が用意された。

「実は今日、役場に呼ばれて特別な仕事を任された」

「特別な仕事？」

嘉平が聞き返した。伊助はただ黙つて聞き入っている。

五郎太の話では、ロシア帝国の皇太子の船が神戸に來ているとのこと。さらに、來週になつて琵琶湖を見物にこの大津にやってくる。ついではその際に人力車を用立てることになつたと五郎太は嘉平と伊助に告げた。

「いいか嘉平に伊助。あいてはロシアの皇太子とお付きだ。やつらは図体がでかいと聞いている。武家の産まれとして引けを取るわけにはいかない。この丸大でもつとも体格のいいおまえらにその役を勤めてもらう」

五郎太の顔つきは真剣そのものだった。丸大にとつてこのうえない榮譽であり今後の商売の展開にも大きく貢献することは目に見えていた。それにはどんな些細なことであっても粗相は許されない。あいてはロシア帝国の皇太子である。不祥事がおきれば日本国との

戦争に発展することも考えられる。現に噂では、ロシア帝国は日本国を従属国としたいとの思惑が見え隠れしていると五郎太は役場の重役から聞かされていた。

「いいか、嘉平に伊助。琵琶湖の見学ともなれば行って帰って丸一日の仕事になる。東西どちらの湖畔に向かうのかも当日までわからない。考えられる湖畔までの道中は三通りだ。明日から順番にこれらの道を実際に車を引いて下見をおこなうことにする。それが終わったら当日まで身体をゆっくり休めろ。もちろんその間の給金は払う。他に特別手当も出そう」

五郎太は、当日用の車夫の衣装として真新しい腹掛けと半纏・足袋を嘉平と伊助に渡した。

「いいか、当日は真新しい禪ぜんにさらしを巻いて」と、五郎太は付け加えた。

翌日から、五郎太は嘉平と伊助に人力車を引かせて琵琶湖までの道のりを入念に確かめた。万が一にも暴漢に襲われることがあってはならない。人が潜むのに好都合な葦はすでに役所の手によって刈られていた。

五月の柔らかな風が琵琶湖の湖面を浮遊し、ロシア帝国の皇太子に話しかける。嘉平が皇太子を乗せた人力車の梶棒を握る。伊助は、いつでも交代ができるよ

うにその脇に控えながら歩調を合わせる。人力車の前後には警備の警官が三人づつ張りついている。さらに外務省の役人と滋賀県庁や大津町の役人が接待兼案内役として五人ほどが同行している。さらにはロシア帝国海軍の将校と海兵が五人、警護役として就いていた。海兵と警官の腰に携えられたサーベルは歩調に合わせるかのように揺れている。

「これでは暴漢も襲って来れるはずはない」

嘉平は、梶棒を握る手の汗を首に下げた手拭いで拭いた。

「嘉平さん、危ない」

伊助が叫ぶ。

嘉平が梶棒から手を離れた一瞬の隙をついてすぐ前を歩いていた警官がいきなりサーベルを抜いた。嘉平の顔が一瞬凍りついた。嘉平は咄嗟に人力車を右に降って警官のサーベルをかわした。サーベルの切っ先が皇太子の右腿をかすめ空を切った拍子に嘉平の右腕をもちすめた。

しとめ損ねた警官の身体はよろめいた。体制を整えなおすと警官は、振り向きざまに再び襲いかかってきた。

「やめろっ」

嘉平は大声で叫び、夢中で自身の身を皇太子に重ねた。

「いいかげんにしろ。おまえは日本国の恥だ」

伊助が大声を上げる。と同時に、暴漢と化した警官の背後からサーベルを握る右手首を掴み、羽交い締めにした。

「うるさい。放せ。おれには大義があるんだ」

暴漢が必死の形相で叫ぶ。

時間にしてどれくらいかの出来事だったのか、嘉平にも伊助にもわからない。護衛の警官がサーベルを抜いて暴挙に出てから、護衛の海兵や他の警官がこの男を拘束して手錠を掛け、連れ去るまでに一、二分といたところだった。軽傷とはいえ、国賓であるロシアの皇太子が暴漢に襲われ怪我をした。ましてや暴漢は警備の警官だった。日本政府にとつて、ロシアから難題を押しつけられることも考えられる。皇太子に万が一のことがあれば、戦争になることさえ覚悟せねばならないほどの出来事だった。それを救ったのが嘉平と伊助の咄嗟の行動だった。身を挺して皇太子を庇い、暴漢を取り押さえた二人の活躍振りを聞いたロシア皇帝が報奨金と生涯年金を与えたいと申し入れてきた。安

堵した日本政府も嘉平と伊助に勲章を与えた。さらに、日本政府からも報奨金と生涯年金が約束された。

「嘉平も伊助もよくやってくれた。さすがは武士の血筋、わしも鼻が高い」

以来、丸大には嘉平と伊助を指名してくる客が絶えない。五郎太はことあるごとに二人を褒めちぎった。

「嘉平どうだ、くるま屋を始める気はないか？ おまえならどこの地に行っても、車夫を何人も抱える親方になれる。役所の鑑札だつて問題はない。わしが後ろ楯になる」

五郎太は、ロシア皇帝からの報奨金と日本政府からの報奨金を合わせれば充分な元手になると付け加えた。「元締め、ありがとうございます。しかし私は人力車から足を洗おうと思っております」

思ってもいなかつた嘉平の言葉に五郎太は啞然とした。

「私は、倅に日本国を左右するような仕事に就いてもりたいと思つています。そのために必要な学問を身につけるために年金を使おうと思つています。そして報奨金で農地を買い入れようと思ひます。土地さえあれば喰うに困ることはない」

「大百姓も悪くはないかもしれんな」



「へえ、野洲川辺りなら土地も肥え、米作りや牛を飼うにはもってこいかと」

時代が変わったことで、下級とはいえ武士としての誇りも暮らし向きも地に落ちた。喰うことさえまかならないところを五郎太に拾われ、車夫としてではあつたが暮らし向きを建て直すことができた。いや、白米を口にすることができるとの暮らしはそれ以上かもしれない。しかし、車夫は常に車上の客から後ろ姿を見下されながら梶棒を操らなければならぬ。客のわがままに眉を釣り上げることなど許されはしない。役にもたない武士としての意地や誇りが、嘉平の頭にもたげ掛けていた。大百姓になることで小作人を抱えることができる。頭を下げる相手も限られてくる。大小を携えることはなくても、少しは武士としての誇りが取り戻せるのではと考えていた。

報奨金の額は、嘉平が幼いころ父に手伝って耕していた農地を遥かに上回り、大百姓になることも可能にさせるほどだった。

「じゃあ、伊助。おまえはどうだ？」

「へい、あつしは嘉平さんと違って親も子もいません。年金があれば何も働くこともねえし……。あつしも、

車夫の暮らしはやめようかと……」

伊助が丸大の車夫となった時には、五郎太が引き取った人力車の代金と博打で儲けた残りの金とで三十円ほどの持ち金があつたが、みかじめ料として巻き上げられた十円を取り戻すために暇を見つけては賭場に通い、けつかとして十円を取り戻すどころか持ち金の三十円もなくなっていた。さらに車夫の稼ぎの半分は賭け金に消えていた。

五郎太の世話になって三年。一向に目が出なかった伊助にも、ロシア皇太子の車引きが功をもたらし、一生喰うに困らない年金と報奨金。働くこともなく大きな勝負ができる元手が保証されたとばかりに伊助はこれまでよりも足蹴なく賭場に通うようになるだろう。五郎太には伊助の先々が見えるような気がした。

ロシア帝国の皇太子が天津で襲われて十年。ロシア帝国と戦争することになった日本国。

「おう、伊助。ロシアに加え、お国にからも年金が取り消されたら博打もできんわな」

「おうさ。だいたいあの時、ロシア人が切られて死んでいれば良かったんだ」

「おまえは国賊だ。二度とこの賭場に面をだすんじゃ

ねえ」

敵国であるロシアから年金など支払われることもなく、功績を讃える声は国賊として罵る声に変わり、賭場への出入りはもとより日銭を稼ぐ人足仕事さえ伊助には回ってこなくなつた。

「伊助さん、悪いね。あんたと口を利くと私まで変な目で・・・」

あれほどに親しくしていた長屋の住人からも見放され、伊助の暮らしはどん底と化した。

ロシア帝国との開戦は大百姓の嘉平にとつても苦難を強いられることとなつた。

「嘉平さん、申し訳ないが店うちではあんさんとこの米は引き取れん」

「そんな、急にいわれても・・・」

「ここいらでは、嘉平さんは有名や。敵国からもろうた金で大百姓になつた国賊やて」

「それは十年も前のことや・・・」

「まあ、やつかみもあるやろ。しかし、事実や。だからといって長い付き合いや、無下にもでけん」

「おおきに、じゃあ」

「あわてなさんな。店とこやのうて京都まで運んだら

どうや？」

「京都？」

「そおや。京都に付き合いのある問屋があるさけえ、話は通しといてもええで」

京都まで運ぶとなると人足賃が余分にかかる。早朝に立つても帰りは夜や。ましてや帰りの空荷は無駄でしかない。それに、今となつては人足だつて集められるかどうかは怪しい。しかし、近在の町ではどこの問屋も買い受けてもらえないことは目に見えていた。

何人もの小作人を抱える大百姓であっても、作物の買い手がいなければどうにもならない。小作人への手間賃は米やその他の作物を分け与え、町に行商に出ることで金が替えることもできる。が、大百姓を維持するには金がかかる。大八車や天秤棒での商いでは屋台骨を支えることなど叶うはずもなかった。ロシア帝国からの年金も、日本政府からの年金も御破算となつた今、収穫した作物を金に替えるには京都に運ぶこと以外の選択肢が嘉平にはなかった。

「だんなさん、あんたは大百姓だ。わしら小作人はあなたに世話になつてゐる。それでも、世間から後ろ指刺されてまで世話にはなりとうない」

「そおか。それでこれからどうする」

「町に出ておつかあと二人、日雇い人足になつても子供たちを・・・」

嘉平は離れて行く小作人に、苦勞を掛けると五円を渡し、これからの暮らし向きを案じた。

嘉平は行く当てのない年老いた数人の小作人とともに懸命に田畑を耕しながら、この先を如何にするべきか思索した。

ロシア帝国との戦いは、わずかに一年あまりの戦争で終結し、日本国の勝利で終わった。だからといって国賊の汚名から開放されるまでには、時間が掛かることを嘉平は覚悟するしかなかった。

「これからの日本国は世界に出て行かなければならぬ。そのためには戦争だつて覚悟する必要がある」

嘉平は軍の補強が最優先される世の中が来ると確信した。

「みんな、これからは軍馬の生産に力を注ぐことにする」

嘉平は、残った小作人を前に米主体からの脱却を宣言した。日本政府による軍馬生産の奨励に積極的に関わることによって、耕作しきれない広大な土地の有効利用と国賊の汚名からの脱却を図りたかった。これまでも農耕用の黒毛牛や荷車引き兼用の馬、それにや

ぎなどを飼育してきた経験から種付けや出産における知識が嘉平にはあった。

「とうさん、僕は士官学校に入ることになります。軍人になることで国賊の汚名を晴らします」

「太郎は衰退しかかっているこの家の先々を案じた。

「太郎、よく言った。どうせなら大将を目指せ」

「はい」

「いいか太郎。下級武士の家柄だからといって後れを取るな。これまで培った学問をさらに磨け。そして世界を見ることを忘れるな。おまえなら必ずや先んじることができる」

完

この物語は1696年（明治24年）、滋賀県滋賀郡大津町にて起きたロシア帝国皇太子襲撃事件を参考に構成しましたが史実とは異なるフィクションであり、登場人物においても実在するものではありません。